

氏名	岡田 洋坪
ヨミガナ	オカダ ヨウヘイ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第555号
学位授与年月日	平成30年3月26日
学位論文等題目	〈論文〉 露出狂的なものについて—アカデミズムと奇祭の狭間で— 〈作品〉 ×××の解剖—Anatomy of Terror— 〈演奏〉

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	小谷 元彦
（論文第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	伊藤 俊治
（作品第1副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	鈴木 理策
（副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	佐藤 道信
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	

（論文内容の要旨）

第1章「アカデミズムと見世物」では、まず第1章1節「日本の裸」で、日本における裸がどのように捉えられ、変化してきたのか、様々な事象や作品を元に読み解いた。主な内容は、開国前の公衆浴場文化における日本人の裸体観や、維新後に美術学校が設立され、ヌードモデルが美術教育として扱われ始めたこと、黒田清輝が日本で初めて裸体画を公開したことに対する、日本人の反応などから、裸体に対する羞恥心の変容について考察していった。また、ティツィアーノとマネ、黒田清輝とクールベの作品を比較することで、理想美という概念がケネス・クラークの掲げるヌードとネイキッドにどう影響してきたか論じた。そして、篠山紀信と荒木経惟、村上隆の作品を参照し、現代において裸体表現がどのように変化していったか、またヌードモデルと作者、鑑賞者を巡る複雑な視線について考察した。第一章一節では、主に裸を巡る表現について論じられるが、裸体表現に対しては常に、「熱い眼差し」、「冷たい視線」といったものが作品、作家、ヌードモデル、鑑賞者自身に突き刺さり、このような眼差しを誘発する作品群を露出狂的なものを構成する一要素として挙げる。さらに、美術教育が裸体表現の普及にどのように影響していったのか考察した。

第1章2節「見世物化するアカデミズム」では、美術教育におけるヌードデッサンのように、対象を知ること、理解することに重きをおいて行われている、医学における解剖学を中心に参照した。まずは、医学の成り立ちから順に追っていき、医学において解剖学が果たした役割を明らかにしていった。また、解剖学書の古典であり歴史的な大著である、ヴェサリウスの『ファブリカ』を巡る物語を読み解くことで、解剖学と美術の関係性について考察した。そして、アカデミズムと見世物という、一見矛盾しているかのように見えるが、実は交じり合っている関係性に着目し、教育という建前を前提に開催された『人体の不思議展』を参照しながら、映画の中でも見世物性が極度に強いエクスポジション映画や、フェイク・ドキュメンタリーである『宇宙人解剖フィルム』、大伴昌司の『怪獣解剖図鑑』を読み解きながら、隠された裏側や側面を暴き、露出することでものに意味を与えるという、露出狂的な表現の二元的な側面の一つを構成する要素について考察した。

第2章「伝統と見世物」では、日本の奇祭を中心に露出狂的な表現について論じた。第2章1節「日本の奇祭」ではまず、奇祭を奇祭たらしめる要素として、性、暴力、醜を仮説とし、様々な奇祭を参照しながら、何をもちて奇祭とするのか、また奇祭のもつネガティブな要素がもたらす価値や、性、暴力、醜の根底にある恐怖について考察した。そして、祭りにおける裸の意味について、日常における秩序や規範を転換する、コード・リバーサルという概念を用いながら、現代において時代や社会背景とともに、祭りの意味を変化させざるを得ないという状況で、裸の意味はどのように変化していったのかについて論じた。

第2章2節「美術における奇祭」では、ゼロ次元、ヘルマン・ニッチュ、工藤哲巳の作品を参照しながら奇祭と比較し、奇祭のもつ暴力性が、加虐的、被虐的に変化していく過程で、批判的な「冷たい視線」や、カタルシスに期待する「熱い眼差し」が鑑賞者の中に生まれることで、恐怖から疑いの目が生まれていく過程について論じた。さらに、奇祭のもつネガティブな要素がポジティブに転換されていく構造や、工藤哲巳のパフォーマンスにおける不能な暴力性について考察した。そして、奇祭の要素を内包する映画である、『江戸川乱歩全集 恐怖奇形人間』と、『世界残酷物語』を参照し、奇祭の諸要素と、見世物的な表現が混じり合うことで生まれる効果について考察し、疑いの目を鑑賞者に与える、「熱い眼差し」や「冷たい視線」を誘発する手段を探っていった。

第3章「作品解説」では自作品である、『×××の解剖—Anatomy of Terror—』制作にあたりリサーチしたいくつかの事象や作品を元に解説していく。まず、各原子力発電所に併設されているPR施設である原発PR館について、東海村の『東海テラパーク』、『原子力科学館』を参照し、安全をPRし、安心を与えるという広報施設の基本戦略や、現在ではコントロール不能に陥ったリスクアセスメントが、社会に安心を与えることができなくなった背景について考察した。また、日本という災害の多い土地柄、古くから日本各地に点在する、災害後生き残った松の木が伝承として現在まで伝わっている背景を元に、ビキニ環礁の水爆実験で被爆した第五福竜丸事件を受けて制作された『ゴジラ』から、圧倒的な力に宿る象徴性や、時代とともに意味を変化させてきたゴジラの変遷について考察した。そして、恐怖を解剖するという行為について、ギュスターヴ・ル・ボンの『群集心理』と、スタンレー・ミルグラムの『服従の心理』を下敷きに、特殊な状況下における解剖という行為の意味が変化していくことや、解剖行為の潜在的な異常性について自作品の制作プロセスを振り返りながら考察した。

まとめでは、アカデミズムと奇祭において、異常なものが習慣化することについて、「場」における秩序や規範が、外部の理解を得るために教育や伝承がその役割を担っているということや、クールベ、篠山紀信、荒木経惟、ゼロ次元、ニッチュ、工藤哲巳等の表現から、理想美を拒否する方法と、理想美を拒否することで見えるものについていくつかの仮説を元に考察した。そして最後に、露出狂的な表現が、対象そのものや、対象がもつ建前、対象を包み隠す幻想を露わにすることで、「確信をもてなくすること」という意味を剥奪する行為と、「確信をもてるようにすること」という意味を与える行為という二元的な要素を持ち、さらに、「見せる」「見られる」ことで意味が移り変わっていく事象を「生まれ変わる」ことと定義し、結論に結びつけた。

(論文審査結果の要旨)

本論の核となる言葉である「露出狂的なもの」について、岡田は次のように定義する。

露出狂というと自分の性器を路上で見せつけ快感を得る特殊な性的嗜好のように思われやすいが、本論では広義の解釈をし、美術館で展示される裸体画や公共空間の全裸銅像、TVや映画に現れるヌードやグロテスクな場面等々、唐突に出現し、見る者に衝撃を与え、時代や社会のタブーとして受けとめられてしまうものの総体を表す。

さらに岡田は、露出狂という言葉性を性的文脈のみで扱うことを退け、「見えるものの狭間にある見えないもの」を露出する構造と見なそうとする。

こうした定義の範疇に、アカデミズムから奇祭までの事例やエピソードを次々と繋げ、露出狂的なものの特性を列挙してゆく。

例えば露出狂的なものには、明治期にやってきた外国人が日本の混浴場を目にし欲情するような、好奇心に基づく熱い眼差しが存在する。それは冷静な批判精神に根差した冷たい視線ではなく、見られる者に羞恥心を生じさせ、やがて外部のその眼差しは内部化し、見られる者に同様な欲望を生み出してゆく。

さらに露出狂的なものは、芸術として想定された理想美を拒み、共同幻想を崩壊させ、性や暴力に潜在する恐怖を喚起してゆく。それはフロイトが「不気味なもの」(1907)で指摘したように、忘れていた幼年時代の絶対的恐怖体験が大人になって強度を伴い再帰し、新たな意味を生じさせたものでもあるのだろう。

こうした特性に沿って岡田は露出狂的なものの意味を手探りで探し求め、次のような結論に導いてゆく。露出狂的なものとは、ただショッキングでセンセーショナルな表現ではなく、単なるタブー破りや異常行動でもない。それは物事本来の姿を明るみに出し、隠された意味を救い出すことである。ゴジラが時代によりその姿を変容させ、揺れ動く環境と共にそのメタファーを変化させていったように、露出狂的なものも生成変化し、その概念を変えてきた。敢えて言えば露出狂的なものは、トートロジカルな円環を断ち切り、物事をゼロへ戻し、その意味を生まれ変わらせてゆくものなのだと結論づける。

例示される事柄やエピソードがあまりに多岐に渡り、途中で論点がずれることもあったが、独特の視点から隠蔽されていた表現構造を解明し、それらを強引にでも関係づけようとした努力と勇気は評価したい。以上の理由により博士号に値すると判断した。

(作品審査結果の要旨)

岡田洋坪の修了作品「×××の解剖-Anatomy of Terror-」は、博士論文「露出狂的なものについて—アカデミズムと奇祭の狭間で—」で論じられた「露出狂的なもの」が持つ価値と問題点を実証的に明示するものとして制作された映像作品である。

岡田は論文で、近代日本における羞恥心の変容、裸体表現と美術教育、医学解剖に潜む見世物性、奇祭が奇祭である理由について分析を行い、さまざまな価値観が秩序や規範によって設定され、美醜や聖俗を分ける基準も「場」によって異なることを指摘した上で、「露出狂的なもの」とは「見えるものの狭間にある見えないものを露出するための構造」だと定義している。この「見えるもの」は、ある社会の内部で共有される価値観に沿うもののことで、岡田はそれを共同幻想と呼ぶ。共同幻想から逸脱するものは見られては都合が悪いものであり、普段は隠されているが、敢えてそれを衆目に晒すことで、何が隠されていたか、何故タブーとされていたかを考えるきっかけを与え、意味や価値観の刷新をもたらす。つまり、わざわざ見せつける「露出狂的なもの」には社会や文化を生まれ変わらせる力がある、との考えが示されている。

修了作品「×××の解剖-Anatomy of Terror-」はゴジラを解剖する男たちの映像である。裸火が揺れる仄暗い室内で防護服に身を包んだ男たちが黙々とゴジラを解体してゆく映像は明らかにフィクションだが、何らかの儀式を記録したドキュメンタリーのような雰囲気でもある。見ているうちに虚と実、聖と俗、恐怖と滑稽、美と醜が時折入れ替わる感覚があり、しかし目の前で何が行われているかが理解できず、気味が悪い。ゴジラは原発の隠喩であること、解剖は対象を理解するための行為として行われていること、本作品の源泉にはフェイクドキュメンタリーの「宇宙人解剖フィルム」や大伴昌司の「怪獣解剖図鑑」があること、特殊な状況下に置かれた人間のふるまいを引き出すために出演者を含めてカメラマン等のスタッフにも最小限の指示のみで即興的に撮影したことが論文で示されているが、それを読んだ後も映像は得体が知れない恐ろしさを保っている。人間は理解を超えたもの、わからないものに対して恐怖を感じると岡田が指摘している通り、分析的に恐怖が実践されている。論文において仮定したことが実証された稀有な結果で、この時代を生きる作品として非常に説得力を持つ。以上の理由から博士号に値する作品と判断した。

(総合審査結果の要旨)

岡田洋坪は学部時代より平面、立体、映像等、多様な手段でユーモアを交えた破壊的、悪趣味とも捉えられる作品を制作して来たのだが、本博士過程では作品のビジュアルに隠された背後のコンセプトや成り立ちを探求した。博士提出作品は、長尺の映像作品で、ゴジラを集団で解剖し、内臓や骨を取り出したあと選ばれた1名がゴジラの内部に入り、最後にジョンとヨーコとして転生するという物語である。

3. 1 1 後に我が国の原子力発電の有無が活発に議論され、現在の北朝鮮と我が国とのミサイルを巡る緊張状態、シン・ゴジラが公開された昨今において、人的、自然災害のメタファーであるゴジラというモチーフ、そして平和主義をテーマとして扱うのは難しいタイミングだっただろう。ゴジラとオノ・ヨーコという存在は、外国人にとっての日本のシンボルとして機能し、中野明氏が定義した熱いまなざしと冷たい視線の両方をいまだ兼ね備えた対象とも考えられる。まず岡田が果敢にも我々にインプリントされたモチーフのシンボリズムを拡大し、露出狂というテーマに則して利用したことは評価したい。

映像には所々にマグリット作品のイメージや第5福竜丸などのイメージがインサートされている。特にマグリットの青い林檎は重要な象徴だ。マグリットにとって「見えるもの、見えないもの」の象徴だった青い林檎は、岡田の今回の論文のメタファーのようだ。青い林檎がほのめかすものは、アップルレコードであり、ビートルズの誕生であろう。岡田は論文中で露出狂とは生まれ変わりの起点としている。映像内では奇祭のごとくゴジラを解体し、生まれ変わりの儀式のアイテムとしてゴジラのイメージを扱っている。この映像内のゴジラは小型サイズで、恐怖の象徴性を失った昭和後半に作られたゴジラの着ぐるみが参照にされているためか、これまでの岡田作品と通底するキッチュな印象を与える。ある意味では、人間の味方についたゴジラを解体しているのはブラックユーモアとして、より作品にシリアスさを与えている。この解体シーンは、論文内の大伴昌司による怪獣の内部構造の図解との関係や宇宙人解剖フィルムを想起させ、ラストシーンで誕生するガウスがかかった裸のジョンとヨーコは、近代化への扉やアカデミズムにおける裸体へ接続が試みられていると考えることも出来る。

最終的に露出狂という「見る、見られる」の制作者にとって根源的な言葉を巡って展開された論文ではあるが、結論の説得力はやや弱い印象である。さらに、独自の解釈に結びつけるためにアカデミックな場所から奇祭や映画まで事例やエピソードを多岐に展開したことで、論点がずれている箇所もあったと副査の指摘があったが、多岐にひろがった論文のトピックの多くと実作品の関係を照らし合わせると、両方がかなり密接に連結されていることは、総合的に評価できると判断する。

以上の論文と作品の考察によって岡田洋坪は博士過程に相応しいものとして判定する。